

# 『徒然草』の研究—第七六段について—

● 土 屋 博 映

## 一、はじめに

『徒然草』は序段プラス243段の、244段からなる中世の随筆文学として名高いが、244段の段区分は、作者が区分したものではない。読みやすさ、便利さを考えて江戸時代の学者が手を加えたものである。便利ではあるが、その便利さが、時に作品の本質を覆い隠してしまうことがある。該当章段の前後との関わりがあるのに、段区分はそれらを別世界というイメージで遠ざけてしまう。したがって我々『徒然草』研究者は、その段区分を再考し、作品の隠されてきた本質を見抜き、世に知らしめる必要がある。具体的に、問題となる章段群をとりあげ、追求しなければならないのである。本稿では第七六段を取り上げ、以下に続く第七七段から第八〇段までの段区分の是非を問うてみたい。

## 二、第七六段

### 1、全文

世の覚えはなやかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く行き訪ふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたたずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。(本文は『日本古典文学全集』(小学館)による。以下同じ)<sup>(註1)</sup>

本段は二つの文から成り立つ。「聖法師」と「法師」がキーワードである。主張は後半の「さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん」である。『全集』頭注には以下のように記されている。

「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ」(一段)といった兼好は、自分が通世者であるだけに、法師の言動には、特に敏感で手きびしい。この段は、その点でも次の段に連続している。 (『全集』頭注)

### 2、検討

本文を検討する。

「世の覚えはなやかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く行き訪ふ」は、権力者とか富裕者のところで冠婚葬祭があって、人が沢山訪れる、ということである。

「中に、聖法師のまじりて、いひ入れたたずみたる」は、その訪問者の中に、「聖法師」がいて、取次をもとめてたずんでいる、というのである。「聖法師」については、『全集』頭注には、「修行僧。名利を去り、諸国を遍歴、山中に庵を結んで修行に専念した民間僧」とある。一般にこういう修行僧は、本書の書かれた時代には多かったといわれている。修行僧である実の僧侶が、何かおぼれにあずかりたいというようなところだろうか。作者は続いて「さらずともと見ゆれ」

とまとめる。そんなことはしなくてもいいと、否定的な見解である。

「法師は人にうとくてありなん」がこの段のまとめとなる。「法師」は俗世間の人とは関わらない方がよいという主張である。この主張は、『全集』では、「法師というものは、世間の人に疎遠であるのがよからう」と、訳されている。

一つ気になるのは「聖法師」という言い方である。「聖」というのは、通常「高德の僧」を指すものであり、敬意の抱かれる存在であるのだが、本書には本段と次の第七七段にのみ「聖法師」として「聖」が「法師」と結びついている。本書では、「法師」と言えば、あまり尊敬されないものなのだが、それが、尊敬されるべき「聖」と結びつくのは、注目すべきである。この「聖法師」が共通に存在するだけでも、本段と次段の関連深さがうかがえるのである。

『全集』頭注にも「この段は、その点でも次の段に連続している」と記されるのも当然である。

ちなみに桑原博史は、次のように述べている。

「ところで、この二つの文章中に登場している聖法師とは、何であろうか。聖という呼び方は、他の章段にもあるが、聖法師というのはこの二箇所だけである。『聖』と『法師』という二つのものをさすという解釈はない。普通、注釈書では、僧衣僧官につかず極楽往生の行を専修する民間僧、と説明されているが、それを限定して、高野聖をさしていると考えてはどうだろうか。

(中略)この章段が指摘するように、世間の声望が盛んな家に聖法師が訪れるのは、高野聖としての勧進のためかも知れない。時の人の身の上に通じているのも、そういう人がもっとも多数の費用を渡してくれるからかも知れない。しかし兼好はかりにそうであっても、世俗との触れ合いをきびしく警戒したのである。」<sup>(註2)</sup>

### 三、第七七段

#### 1、全文

世の中に、その比人のもてあつかひぐさに言ひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。ことに、かたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、わがごとく尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと覚ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。

本段は、二つの文から成り立つ。前半は「いろふべきにはあらぬ人」がポイントである。後半は、「聖法師」が中心である。全体においてもこの、「聖法師」が話題のかなめとなっている。第七六段のように、「法師は人にうとくてありなん」というような主題めいたものはない。『全集』頭注には、以下のように記されている。

「法師に対する批判が続けられる。この段では、「かたほとりなる」法師が檜玉にあげられる。都びとの感覚が、よかれあしかれ『徒然草』を貫いていることを留意すべきだ。」(『全集』頭注)

#### 2、検討

まずは冒頭の一文「世の中に、その比人のもてあつかひぐさに言ひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。」を検討する。

この部分、『全集』の訳では、「世の中に、そのころ人々が話題の種として言ひあっている事を、関係するはずではない人が、よく事情を知って、人にも話して聞かせ、尋ね聞いているのは、まったく納得がゆかない。」とある。『全集』頭注では、「もてあつかひぐさ」は「噂の種。評判に

なった話題」であり、「いろふ」は「かかずらう。関係する。」である。

要するに、噂と無関係な人間が詳しく事情を知っていて、人とやりとりすることが、作者にとって、納得がいかないということである。

次に、「ことに、かたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上は、わがごとく尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと覚ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。」であるが、ここで問題の「聖法師」が出現する。前章段と同様、キーワードであり、この一語だけで、前章段と関連深いことがわかる。この部分、『全集』訳では、「ことに片田舎にいる聖法師などが、世間の人の上は、自分のことのように尋ね聞き、何でこれほどにも知ったのだろうかと思われるまで、言いちらすようだ。」となっている。前半の「いろふべきにはあらぬ人」の「人」に対応するのが「聖法師」である。

要するに、俗世間のできごとに、不必要にかかわることは、作者の嫌うところなのだ。それが、俗世間の人間よりも、仮にも仏教者である「聖法師」が関わることには、大変な拒否反応を示すというわけである。

前章段（第七六段）で、「法師は人にうとくてありなん」と評価した流れがそのまま本段にも及び、前半の「うけられね」が、前段の評価を受け継ぎ、やはり「聖法師」への批判となっているのである。

## 四、第七八段

### 1、全文

今様の事どものめづらしきを、言ひひろめ、もてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし。いまさらの人などのある時、ここもと言ひつけたることぐさ、もの名など、心得たどち、片端言ひかはし、目見合はせ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世なれず、よからぬ人の、必ずある事なり。

本段は、三つの文から成り立つ。キーワードは「今様」「心にくし」「よからぬ人」である。冒頭の「今様の事どもの」に始まる一文が主題をなしている。『全集』頭注には以下のように記されている。

「典雅を尊重し、慎み深くこまやかな人間関係をよしとする兼好の黙止できない、当世の「よからぬ」人が、生き生きと描かれ、具象的な批判が展開されている。ここには、理屈で批判するより、簡潔な描写でもって、それらの人々をつきさしているところがあるといえよう」（『全集』頭注）

### 2、検討

まず、冒頭の一文「今様の事どものめづらしきを、言ひひろめ、もてなすこそ、又うけられね。」から検討する。「今様」については、『全集』頭注に「今時。当世。」とある。前々章段（第七六段）の「世の覚え」、前章段（第七七段）の「世の中」とほぼ同じ表現と言える。また、「言ひひろめ、もてなす」は前章段の「言ひ散らす」と類似表現が、「うけられね」については同一表現が、前章段には存在する。さらに重要なのは「又うけられね」と「又」が存在することである。これは明らかに前章段を意識しているので、前章段と本段が連続して書かれたのは確実であり、段分けする必要はない。というか、段分けするからかえって作者の主張が不明確になってしまうのだ。

次に、「世にことふりたるまで知らぬ人は、心にくし」を検討する。『全集』訳では「世間で陳腐になってしまうまで知らない人は奥ゆかしいものである」となっている。これは冒頭前文の「言ひひろめ、もてなす（人）」と対照的な人物に対し、「心にくし」（奥ゆかしい）とプラスの評価をしているわけである。これは前章段の「よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたる」とも対照的な人物であり、さらには前々章段の「人にうとくてありなん」と同類の表現ということで、第七六段、第七七段と本段（第七八段）が非常に緊密な関連を持って位置付けられているということがわかるのである。

最後に、「いまさらの人などのある時、ここもと言ひつけたることぐさ、ものの名など、心得たるどち、片端言ひかはし、目見合はせ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はする事、世なれず、よからぬ人の、必ずある事なり」を検討する。『全集』訳では、「新米の人などのあるとき、こちらで言ひなれている話題や物の名などを、承知している仲間同士が、その一部分だけを言いあって、目を見あわせ、笑いなどして、意味のわからぬ人に、不審に思わせることは、世間知らずで、教養のない人が、必ずすることである」となっている。

ここでのまとめとなっているのは、文末の「心知らぬ人に心得ず思はする事、世なれず、よからぬ人の、必ずある事なり」である。ここで、第七六段から続いた、俗世間に関わるな、噂に乗るな、という流れに、少しばかりの変化がおこった。「よからぬ人」の登場である。

冒頭の一文は、俗世間の話題をふりまく人物への、作者の、「うけられぬ」という否定的見解。続く一文は、俗世間の話題に疎い人への、作者の、「こころにくし」という肯定的見解。最後の一文は「よからぬ人」を話題に登場させ、否定的見解を述べているという構成である。本段は「聖法師」の影が消え、一般人の話題に変化していることにも注目したい。ただ前段までの流れが関係あることは確かで、それは冒頭の一文的「又うけられぬ」の存在からわかるのであった。

## 五、第七九段

### 1、全文

何事も入りたたぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知り顔にやは言ふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、万の道に心得たるよしのさしいらへはすれ、されば、世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へる気色、かたくななり。よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言はぬこそいみじけれ。

本段は、四つの文から成り立つ。冒頭の「何事も」から始まる一文が主題となっている。キーワードは、「よき人」「片田舎よりさし出でたる人」。最後の一文は結論となっている。『全集』頭注には以下のように記されている。

「前段に連続し、こまやかな配慮を欠き、相手の心を理解することのできない『よからぬ人』のあさはかな行為が『よき人』と対比しつつ批判的に描き出されている」（『全集』頭注）

### 2、検討

まず冒頭の一文的、「何事も入りたたぬさましたるぞよき。」を検討する。

「何事も」とあるように、冒頭から、総まとめ的な雰囲気は漂う。『全集』の訳では「何事も深く立ち入って知ったふりをしないのがよい。」となっている。

この「何事も」は、第七六段の「法師は人にうとくてありなん」、第七七段の「よく案内知り

て、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね」、そして第七八段の「言ひひろめ、もてなすさまこそ、又うけられね」をすべて受けて「何事も」とまとめていると考えてはどうだろうか。第七六段と第七七段の「聖法師」が、第七八段から消えてしまったのも、悪の代表としての「聖法師」を槍玉にあげて、最終的に一般人の心得に発展させたものと考えてみたいのである。

続く一文「よき人は、知りたる事とて、さのみ知り顔にやは言ふ。」を検討する。ここでは、「よき人」がポイントである。『全集』訳では「りっぱな人は、知っていることだからといって、そうむやみ物知り顔に言うであろうか」となっている。「よき人」は古典文学には頻出の言葉であるが、一般に「身分・教養が高い人」ととらえられている。

この「よき人」という表現を作者は多用している。基本的に、作者にとってこの「よき人」は、「人間的に信頼できる、教養・知識にあふれる、文化人」という意味合いである。「よき人」の見解を根拠に自説を主張するという例が、本書中に多々見られるのである。この一文から、「知りたる事」を「知り顔」に「よき人」は言わないわけで、それこそが立派な人間の証ということをして、作者は主張しているということになる。

続く一文「片田舎よりさし出でたる人こそ、万の道に心得たるよしのさしいらへはすれ」である。自明のことだが、「片田舎よりさし出でたる人」は、立派な人で、模範となる人物の「よき人」と正反対の人物を代表している。いわば「田舎者」である。「田舎者」は「万の道に心得たるよしのさしいらへはすれ」であるという。『全集』の訳を引用すると「どの道にも心得があるといった受け答えはするものだ」ということになる。いわば自分ではなんでも知っているつもり、しったかぶりをして平気な人間である。

続く一文「されば、世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へる気色、かたくななり」である。「されば」は、本書中では、以下に、作者の結論（めいた）ものを表すというパラメーターの役目を果たしている。以下の訳を『全集』で見ると、「聞いているこちらが、ひどく気恥ずかしくなるくらいなところもあるが、当人のほうでも、りっぱだと思っている様子は見苦しいものである」となっている。要するに「知ったかぶり」については「かたくななり」という言葉で、否定しているわけである。

続くまとめの一文「よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言はぬこそいみじけれ」を検討する。この一文、『全集』では「よくわきまえ知っている方面のことについては、必ず言葉を慎み、人の尋ねないかぎりは言わないのが、りっぱなのである」となっている。「よくわきまへたる道」（を志すもの）とはプロの道である。一般人と対照的な専門家である。その道を究めたものと言っていいだろう。そのプロですら、作者に言わせれば、「必ず言葉を慎み、人の尋ねないかぎりは言わないのが、りっぱなのである」ということになる。一連の「知ったかぶり」で「おしゃべり」であることを全面的に否定する作者の一連の思想は、この第七九段において、冒頭の一文、「何事も入りたたぬさましたるぞよき。」と末尾の一文、「よくわきまへたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言はぬこそいみじけれ。」の二文によってまとめられたのである。

## 六、第八〇段

### 1、全文

人ごとに我が身にうとき事をのみぞ好める。法師は兵の道を立て、夷は弓ひく述知らず、仏法知りたる気色し、連歌し、管弦を嗜みあへり。されど、おろかなるおのれが道よりは、なほ人に

思ひ侮られぬべし。

法師のみにあらず、上達部・殿上人、上さままでおしなべて、武を好む人多かり。百度戦ひて百度勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は、運に乗じて敵を砕く時、勇者にあらずといふ人なし。兵尽き、矢窮りて、つひに敵に降らず、死をやすくして後、始めて名をあらはすべき道なり。生けらんほどは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獣に近きふるまひ、その家にあらずは、好みて益なきことなり。

本段は、前半、後半の二段落から成り立つ。キーワードは、「法師」「上達部・殿上人、上さま」「武」である。前半冒頭の「人ごとに我が身にうとき事をのみぞ好める」が主題である。後半、最後の「人倫に遠く、禽獣に近きふるまひ、その家にあらずは、好みて益なきことなり」が結論となっている。『全集』頭注には以下のように記されている。

「元弘の乱に当面する時期に書かれたと思われるこの記事には、内乱時代の世相がおのずからにじみ出ている。しかし例によって兼好は、時代を社会的な視点からはとらえようとせず、専門の道から逸脱した人間を、その足下から批判するという態度である。ただ内乱に対する超越的な立場は、武に対する特別きびしい批判となり、かたがた彼の貴族的かつ保守的な思念を表現することになっている」（『全集』頭注）

## 2、検討

第八〇段については、参考までに述べておくこととする。第七六段から第七九段までの四段は、一連の流れをもっており、一気に書かれたものであろうと推定されるが、第八〇段には、現時点では、それほど強い関連性は見いだされていない。ただ、以下のようなことは言えそうである。

本段は二段落に分かれているので、まずは前半から見て行く。

冒頭の一文は、「人ごとに我が身にうとき事をのみぞ好める」である。「人ごとに」であるから、「人間全部」が、自分の身に「うとき」（無関係な）事ばかり「好める」だという。つまり、自分の専門を究めずに門外漢となり、他の技を好むのが一般の人間だということである。その例が続く文である。

続いて。「法師は兵の道を立て、夷は弓ひく述知らず、仏法知りたる気色し、連歌し、管弦を嗜みあへり。」と、「法師」と「夷」（『全集』頭注に「荒夷。東国武士。」とある）が専門でないことを楽しんでいるというわけである。

続いて、「されど、「おろかなるおのれが道よりは、なほ人に思ひ侮られぬべし。」と記される。「おろかなるおのれが道」は『全集』訳に「いいかげんな自分の専門よりは、いっそう人に軽蔑されてしまうに相違ない」とある。専門がおろそかであるが、そんなことよりも専門以外に現を抜かず、趣味について、他人から軽蔑されるというのである。

ここまでが前半で、後半は、前半の「人ごとに」「法師」「夷」から、「上達部・殿上人」「上さま」から始まる。

後半冒頭は、「法師のみにあらず、上達部・殿上人、上さままでおしなべて、武を好む人多かり。」となっている。恐らく当時の状況から、世の中は「武を好む人多かり」であったのであろう。以下は「武」に対する批判が続く。

次の「百度戦ひて百度勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし」はいくら勝っても「まだ勇者の名を決定的なものにするわけにはゆかない」（『全集』訳）と「戦い」には否定的な見解を示す。

次に、「その故は、運に乗じて敵を砕く時、勇者にあらずといふ人なし」と記される。戦って

いる間は真の勇者ではないといい、さらに次の一文に続く。

続いて、「兵尽き、矢窮りて、つひに敵に降らず、死をやすくして後、始めて名をあらはすべき道なり」と存在する。「平然として死んで後、はじめて、真の勇者たる名をあらわす」（『全集』訳）と言い切る。

次の一文「生けらんほどは、武に誇るべからず」が本段の結論（主張）である。『全集』訳には「生きていよう間は、武勇を誇ってはならない」とある。

本段末尾の一文は「人倫に遠く、禽獣に近きふるまひ、その家にあらずは、好みて益なきことなり」である。『全集』訳には「武道というものは、人間の道にはずれ、鳥や獣に近い行為で、武士の家柄でなくして、好んでも無益なことである」とある。

結局第八〇段は、時代の世相を表している点で、前段までの流れとつながる面はある。「法師」を取り上げたのもその一つであるが、「上達部・殿上人」などの「上さま」を取り上げ、本来「武」の家柄でないものまでが「武」を好むことを否定する面が強いのである。

## 七、結論

一～五で、第七六段から、第七九段までとりあげ、さらに参考として、六で第八〇段をとりあげた。

筆者の目下の研究の主眼は、『徒然草』の本質を追求するところにある。その一つの目標として、既に一で述べたことだが、現在の本書の段区分ははたして問題がないのか、ということ、明確にするために、研究を続けている。

本稿では、第七六段から、第七九段までは密接な関連性があり、四章段に分けるよりは、一章段でまとめ、四段落としてとらえるのが、作者の本来の意図であろうという結論に至った。第八〇段も射程にいれたのだが、連想の発展はあるとしても、それまでの四章段と同一段にまとめるのは無理がありそうだと、現時点では判断した。

また本稿ではふれなかったが、第七五段、さらに第七四段についても、同一章段は無理としても、連想の発展という点では、看過できない存在と言えるということを付記しておく。

以下、各段のポイントをあげて、その関連性をまとめておく。

第七六段

「聖法師」「法師は人にうとくてありなん」

第七七段

「人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね」「聖法師」

第七八段

「言ひいろめ、もてなすこそ、又うけられね」「知らぬ人は、心にくし」「よからぬ人」

第七九段

「何事も入りたたぬさましたるぞよき」「よき人」「片田舎よりさし出でたる人」「問はぬ限りは言はぬこそいみじけれ」

以上のポイント（キーワード）を抑えると、それぞれの章段が緊密に連結していることがよくわかる。とくに重要なキーワードを並べ立てれば以下のようなになる。

「聖法師」（第七六段）→「聖法師」「うけられね」（第七七段）→「うけられね」「よからぬ人」（第七八段）→「よき人」（第七九段）

また第七九段の「何事も入りたたぬさましたるぞよき」が四章段全体の主題（結論）ともなる

べきもので、これにより、第七六段からの四章段は一章段としてとらえておくべきで、そうやって始めて作者の本来の意図が伝わるということになるという結論である。

早急な段区分の訂正をもとめたい。

(注1) 本文、訳、注は、『日本古典文学全集』(小学館)に寄った。

(注2) 『徒然草の鑑賞と批評』(明治書院)に寄った。